

## 郷土と文学 「文学旅行」

竹盛 浩二

本校国語科ではこれまで、〈教室の外に出る国語教室〉として、1974年以来、「万葉旅行」や「源氏物語の旅」「平家物語の旅」などを実施し、ほとんど毎年、京都や奈良明日香の地を訪れてきた(※<sub>i</sub>)。近年では、「郷土と文学」をテーマに掲げ、鞆の浦を詠んだ大伴旅人の歌を鑑賞し、実際に鞆の浦に出かけてきた(※<sub>ii</sub>)。今年度、3年生は国語担当のライフを16名が選択した。〈教室の外に出る国語教室〉の流れのなか、「郷土と文学」というもうひとつのテーマをどのように具体化させるのか。

以前から、福山出身の井伏鱒二の文学の、教材としての可能性については、いくらか研究もしてきた(※<sub>iii</sub>)。井伏には、「山椒魚」「屋根の上のサワン」や「黒い雨」など、生徒に読ませたい作品がある。加えて、福山市には、2年前の1999年4月に開館した「ふくやま文学館」がある。井伏鱒二の展示を中心に、郷土出身の文学者たちの紹介がしてある。有効に利用したい文化施設である。また、福山市加茂町には井伏の生家があり、井伏文学の原風景を見ることもできる。出かけてみたいものである。

教室で、ゆったりと文学を読み、考える。そして、ふわりと教室の外に出る。これがコンセプトである。それには、生徒の主體的な活動が基本となる。

以下に示すのは、1年間の大まかな展開である。

- |   |                                      |
|---|--------------------------------------|
| ① | オリエンテーション                            |
| ② | 井伏の短編を読む。(新潮文庫「山椒魚」、角川文庫「屋根の上のサワン」)  |
| ③ | 読んで考えたことを話し合う。(感想発表会、討論会、研究など)       |
| ④ | 「ふくやま文学館」に出かける。                      |
| ⑤ | 井伏の長編を読む。(新潮文庫「黒い雨」)                 |
| ⑥ | 井伏の生家を訪ねる。                           |
| ⑦ | 映画「黒い雨」を見る。(今村昌平「黒い雨」)               |
| ⑧ | 大江健三郎講演「井伏さんの祈り、私の祈り」を聴く。(新潮カセットブック) |
| ⑨ | まとめ                                  |

このような流れで展開していったのだが、ここでは、二度の「文学旅行」(④と⑥)の前後にポイントをしぼり、授業の様子や生徒の活動を報告する。

- (1) 「山椒魚」を読んで、どのような感想を抱いたのか  
いろいろなことに縛られ、悩み、心と体のバランスに苦しんでいる自分たちのすがたを、「山椒魚」に重ねて読む生徒が多いようで、次のように、そのことを明確に表現するものもいた。

■この話は、山椒魚を現代の人間に例えているように思います。いつのまにか狭い岩屋の中に閉じ込められていて、出ることもできず、ただ楽しみは、小さな穴からのぞける外の世界を眺めることだけ。これは、今の世の中で、いろいろなことに縛られている私たちに似ていると思いました。…(中略)…

窮屈で仕方のない毎日。自分にはないものを嘆いて、それを持つ他人に憧れ、相手を自分と同じような状態にしようとする…。山椒魚の悲しみは、まったくとは言えなくても、そのまま今の私たちに共通しているような気がします。

生徒たちは、それぞれの切り口で、「山椒魚」をゆたかに読んだ。その感想文2編を紹介する。

## ■「山椒魚の涙について」

山椒魚はすごく負けず嫌いだと思った。自分の失敗を認めたくないという気持ちがすごく伝わってくる。「相当な考えがある。」と言ってみたり、小魚たちを不自由千万な奴らだと言ってみたりと、そういうことで自分の失敗を他人にバカにされないようにしているのかなと思った。けれど、蝦に「物思いにふける奴は、ばかだよ。」と言ってみたり、山椒魚の気持ちの変化は、他の生物を見るたびに変わっていったとおもしろいと思った。

けれど、私はこの山椒魚は、普通の山椒魚だと思う。少しまぬけで、さみしがりやなだけだと思う。さみしすぎて、蝦に意地悪をしてしまったのだと思

う。だれでも持っている心のすみの気持ちだと思う。相手がうらやましすぎて、どうしようもなく心が狭くなってしまったのだ。少しかわいそうで、強がってみたりと、かわいらしさも持った山椒魚だと思った。

ところで、彼は二度泣いた。さみしかったからだ。悲しかったからだ。自分の姿にむなしくなり、どうしようもないことに気が付き、これから先のことを考え、暗くて、こわくて、どうしようもない気持ちだったのだ。気が弱く、やさしい山椒魚だからこそ、泣いたのだ。しかも、泣くにも、一人で思いつめた後に、だれにもしかられまいとしながら泣いてしまったのだ。強がったのだ。山椒魚は山椒魚らしくいたくて、そう考えると、どうしようもなかったのだと思う。

山椒魚は、岩場からでられなかった。しかし二人には熱い大きな友情が芽生えたのだ。と、結末を作るとすれば、こうなると思った。こうなってほしいと思った。

### ■「山椒魚の心について」

山椒魚は意地悪なのでしょうか。「寒いほど独りぼっち」な山椒魚は意地悪なのでしょうか。私は意地悪だとは思えません。彼の行動一つ一つに、自由な者へのうらみや、孤独が感じられるからです。

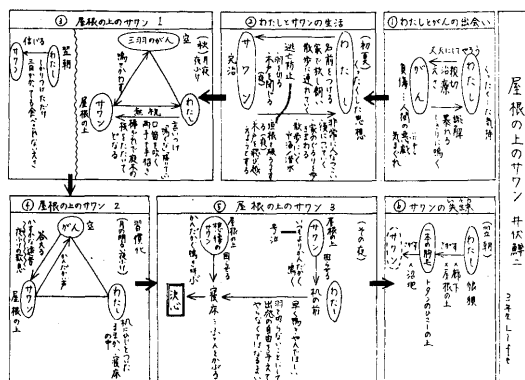
彼の孤独には、この上なく暗く、深いものがあると私は考えます。「彼は自分を感動させるものから、寧ろ目を避けたほうが良いということに気が付いた。」私たちは誰もが、自分を感動させる楽しいもの、美しいものを見たいと思っていました。しかし山椒魚のように、本当に孤独な者にとって、自分を感動させるものは、とても辛く、余計に自分自身を苦しめ、孤独にさせるのだと思いました。

それほど孤独であった山椒魚を救い出したのは、かつて山椒魚を感動させ、彼の目をそらさせた、あの蛙だったのではないのでしょうか。彼は蛙をとじこめた当初、もしかしたら蛙を憎み、苦しめようとしていたのかもしれませんが。蛙も蛙で、理由もなく山椒魚に閉じこめられ、憎んでいたでしょう。しかし、一年中ずっと口論しているうちに、自分が彼によって救われたことに気付いたのではないのでしょうか。蛙もまた、山椒魚の孤独に気付いたのではないのでしょうか。そんな蛙に、強い友情を感じた山椒魚は、これ以上蛙を閉じこめておくことができなくなると言えます。同じように蛙は山椒魚を独りにできなくなってしまったのだと思います。

私はそんな、「寒いほど独りぼっち」だった山椒魚をどうしても意地悪だとは思えません。

(2) 「屋根の上のサワン」を読んで何を話し合ったのか 作品見取り図をもとに、次の二点について話し合った。

1. ⑤の場面での「わたし」の心情は？
2. ⑤の場面で、サワンはどうなったのか？



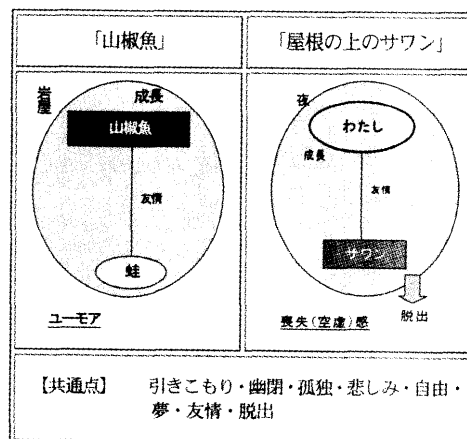
(2000年度前期教生伊勢緑さん作成の見取り図)

屋根の上で号泣するサワンのかん高い鳴き声を聞いて、「わたし」はサワンに出発の自由を与えてやらなくてはならないと決心する。サワンは、その翌朝、「わたし」の前から姿を消してしまった。

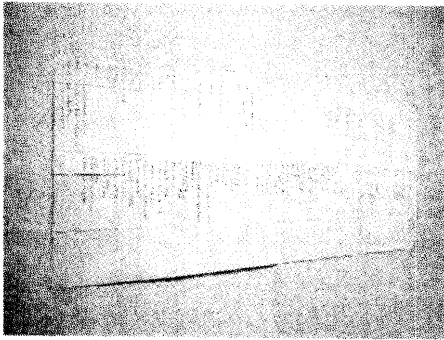
話し合いでは、サワンは飛び立ったのだとか、何かに襲われて殺されてしまったのだとか、いろいろな意見が出されたが、結局、サワンがどうなったのかということよりも、焦点化しなければならないのは、「わたし」の世界からサワンが出ていってしまった、その後の「わたし」の孤独感というものである、ということになった。

(3) 「山椒魚」と「屋根の上のサワン」を比較して、何ができてきたか

二つの作品を比較して、話し合った。その結果を図示すると、次のようになる。



#### (4) 井伏鱒二の文学年表をつくる



あるグループの作成した特大の年表

#### (5) 「ふくやま文学館」を訪れて、何がわかったか

日時：2000年7月8日（土）

9：30～11：30

場所：福山市丸之内 ふくやま文学館

対象：中学3年LIFE（国語）選択生徒 16名

ねらい：福山出身の作家、井伏鱒二の小説を、これまでの授業で読みすすめている。

その井伏文学の展示がなされている「ふくやま文学館」に実際に行き、その展示を見るなかで、井伏文学について、さらなる興味を持つ。これが、このたびの「文学旅行—ふくやま文学館の井伏鱒二—」のねらいである。

費用：入館料無料、交通費各自負担



福山文学館に行き、井伏鱒二とその文学について、次のようなレポートを生徒たちは提出した。

■井伏鱒二の永遠のテーマであり、永遠の問題は、幽閉なのだろうと思います。「幽閉」とは、罰として人を閉じ込め、外に出さないこと。

父の遺言、「子供たちには文学をやらせるな」ということが、彼にとっては、自分のやりたいことを拒まれた、とめられたという、自分ではない世界に幽閉を感じたのかなと思った。

人から遠ざかって、悩みに悩んで、苦悩の連続だったのだろうと思います。まだ、井伏鱒二の作品

を2つしか読んだことがないから、よくわからないけれど、でも、独特の言い回しがあると思う。描写部分は、すごく今まで読んだことのないような感じがした。言葉では言い表しにくいけれど、読んだら、「ああ、…」と、だれが書いたのかわかるような気がするくらい、独特だと思う。それから、すごくユーモアがあって、楽しいというか、クスリと笑える、そんな文章です。

絵と文学を好んで、たくさんの作品を発表し、いろんな賞をもらって、何かすばらしい、はなやかな人生そうなのに、親友の青木南八をはやく亡くしたりと、かなり不幸だったと私は思う。幽閉という、暗いというイメージを持たせるような言葉を題材にし、不幸っぽい人生を送った井伏鱒二を、少し暗い人だと思いました。

「ふくやま文学館」については、次のような感想を書いた。

■私が、文学館と聞いて、まず、頭に浮かんだのが、近代的な灰色の建物と文字一点張りの展示と資料である。しかし、実際行ってみて、想像と実物の差に、私はショックを受けてしまった。それは一見、しゃれたレストランのようであり、家のようにありながらも、文学館のようであった。薄い黄色の壁、瓦屋根、芝の中のお地藏さん。そこを流れる空気からは、文学のオーラがびんびんと感じられた。

建物の中には主に木で造られていて、木特有の優しさ、文学とが調和しているようだった。

■ふくやま文学館に行くことに、私は初めあまり興味を感じませんでした。しかし、実際に行ってみて、一つ、少し興味を持ったものがあります。それは、生の原稿でした。私が今まで読んできたものは活字になってしまった文章だったし、これから読んでいく文章も大部分が活字でしょう。そんな世界の中で、生の、手で書かれた原稿に、私はとてもひかれました。何か、おもしろかったのです。だから、私は、文学館から出たとき、ちょっとした充実感のようなものを感じました。

■私がふくやま文学館を見学して一番印象に残ったのは井伏鱒二の文学が、たくさんの国々へ訳されて紹介されていることです。一番多く紹介されているのは「黒い雨」です。まだ読んだことはないけれど、戦争のことが書かれたこの本が人々の心をとらえた

んだと思う。私も読もうと思う。

(6) 井伏の生家を訪れて、何を感じたか

日時：2000年11月25日（土）

対象：3年LIFE選択者16名

日程：福山駅「釣人像」下 10:00集合

10:20福山駅発～庭田11:01（井笠バス）

生家、窪田邸跡、四川文学碑等

14:19庭田～福山駅15:00（井笠バス）

福山駅前解散

目的：授業では、井伏鱒二を読んでいる。そこで一学期には、井伏文学を展示するふくやま文学館を訪問した。二学期には、井伏の生まれ故郷である加茂栗根を訪れ、井伏文学の原点に目を向けてみたい。

その他：弁当持参，私服可，バス代往復1260円



辻堂のお地藏さん



井伏鱒二生家にて



四川の文学記念碑

■井伏鱒二の故郷を訪ねた文学旅行。坂を上って到着した井伏さんの生家から周りを囲む山などの景色を眺めて、昔ここに井伏さんもいたんだと思うと、不思議な気がしました。その家には今も井伏さんの甥にあたる方が住んでいて、井伏さんにまつわるいろいろな話をしてくれました。本で読んだだけでは分からない裏話的なことも話してくれて面白かったです。それにしても、この加茂という土地の自然のすばらしさには驚きました。特に、窪田邸で見たもみじの木々の色はまるで絵のように美しかったし、井伏さんが遊んだという小川は、今も自然がそのまま残っているようで、井伏さんの作品の多くが、この

場所を題材にしているというのもうなずける気がしました。とにかく、ここでは時間がすごくゆっくり流れている感じがしました。今回この土地を訪れたことで、これから井伏さんの作品を読む上で、イメージがわきやすくなるかもしれません。

■井伏鱒二の生地はとてものどかだった。鱒二の甥にあたる井伏章典さんはとても話し慣れていて、鱒二についていろいろと語ってくれた。窪田邸跡の紅葉はとてもきれいだった。四川の文学記念碑はダムを建設するのと引き換えにつくられたそうだ。四川はとてもきれいで、小さいながらも魚がおり、こんな穏やかな環境で生まれた鱒二の文学の才能はとても豊かだった。四川では私たちは水遊びをした。とても楽しかった。

※

今はちょうど、映画の「黒い雨」を見ているところである。生徒の心の中で、何がどうごめいているのか、わからない。しかし、ゆっくりと時間をかけて、しずかに小説を読み、話し合ったことは、何よりも貴重である。そのうえで、「ふくやま文学館」の展示に見た井伏の世界が、井伏の故郷のゆたかな自然や人情が、生き続けるにちがいない。

（付記）

以上の報告はすでに下記HP上で詳しく公開しているものである。

<http://ns.fukuyama.hiroshima-u.ac.jp/~kokugo/ibuse.htm>

- i 落健一・江口修司・金子直樹・金本宣保・世良馨子・竹盛浩二・信木伸一・藤原敏夫「楽しい国語教室－国語科行事古典旅行 万葉旅行 明日香の旅－」（広島大学附属福山中・高等学校「研究紀要40」2000年3月発行）
- ii 江口修司・落健一・金子直樹・金本宣保・世良馨子・竹盛浩二・信木伸一・藤原敏夫「郷土の文学を読む」（広島大学附属福山中・高等学校「研究紀要37」1997年3月発行）のうち、藤原敏夫『『鞆の津とむろの木－大伴旅人物語』
- iii 江口修司・落健一・金子直樹・金本宣保・世良馨子・竹盛浩二・信木伸一・藤原敏夫「郷土の文学を読む」（広島大学附属福山中・高等学校「研究紀要37」1997年3月発行）のうち、竹盛浩二「井伏鱒二作品の教材としての可能性の検討」